

ひと・行財政分科会

子ども・若者の意見表明に対する意見

- 子どもたちの考えていることが、行政運営に反映していく仕組みが必要。
＜森元 委員＞
- 子どもの意見を聴くというスタンスではなく、子どもの「こうしたい」といったことを行政と一緒に考えていくという方向へシフトしていく必要がある。＜ぬかが 委員＞
- 多様な人の意見や考えを区政に反映させるには、審議会等の男女比率だけでなく、若者の比率なども考慮していく必要がある。＜石阪 分科会長＞
- 子どもに対して「支援する」「支えてあげる」という視点が強いが、子どもが大人と同じ目線に立って考えることができるということも重要ではないか。＜森元 委員＞
- 若者の意見を聴くまち＜野沢 委員＞

人権意識・配慮等に対する意見

- ワークショップ型の講座により一人ひとりが理解していくことで、区民の理解が深まる。
＜秋山 委員＞
- 子どもへの人権教育以外にも、価値観を変える機会がない大人に対しても人権を考えさせる機会をつくる必要があるではないか。＜森元 委員＞
- 人権に関する取組みに対して、条例による裏付けも必要と感じる。＜ぬかが 委員＞
- どんな区民にも分かりやすい文書を作るように心掛けてほしい。＜秋山 委員＞
- 誰もが認め合えるまち＜野沢 委員＞

子ども・家庭への支援に対する意見

- おむつを配付する見守り支援など、今までとは異なるアプローチが必要。
＜ぬかが 委員＞
- 虐待やひきこもりなど、相談しづらい・できない状況があり、また、どこに相談したらよいか分からない方も多い。福祉まるごと相談課のように、一括して相談できる場所があると良い。＜市村 委員＞
- 児童相談所へ相談しづらい・地域に知られたくないということがある。虐待は関わる方のアウトリーチによる気づきが必要。＜山下 友美委員＞
- ひとり親支援は、父親と母親では支援の状況が異なると感じるので、その点も考慮したアプローチが必要。＜森元 委員＞
- 中学生を卒業して就労する方への支援についても施策として必要ではないか。＜森元 委員＞

学校・教育に対する意見

- 地域で学校を支えていくためには、コミュニティスクールが重要になる。
＜野沢 委員＞
- コミュニティスクールの導入が進まないのは、導入メリットが可視化されないことが要因の一つにある。＜山下 友美委員＞
- 開かれた学校づくり協議会は地縁団体が中心の活動のため、それ以外の人の目も学校に向けてもらい、参画してもらうことが重要ではないか。＜片野 委員＞
- 開かれた学校づくり協議会とコミュニティスクールではやることに重複があり、開かれた学校づくり協議会でも特色ある学校づくりに取り組んでいる。＜市村 委員＞
- 「学力を上げる」と「個性を伸ばす」ということが教育の二本柱であることをアピールすることで、足立区の立ち位置を明確にすることができる。＜秋山 委員＞
- 引っ越してでも通わせたい学校があるまち＜秋山 委員＞

その他の意見

- 施設の利用率等を総合的に考慮して、施設の統廃合や民間との連携を考えていく必要がある。＜野沢 委員＞
- 場所がないと支援活動ができないことがあり、公共施設に頼らざるを得ないことがあるため、利用率以外の視点も必要ではないか。＜片野 委員＞
- 様々なメディアを使って情報発信をしてアクセスしやすくする。＜森元 委員＞
- 悪いイメージを脱却する施策をやっていて、良いものを伸ばす施策は足りないため、両方を同時に行っていく。＜市村 委員＞
- 足立区は様々な情報発信を行っているが、区民が発信した情報をどう受け止めたかということ把握し、活かしていくことも重要と感じる。＜森元 委員＞
- 区の頑張りをPRしていく。＜野沢 委員＞
- 足立区民は自虐的になってしまう部分がある。足立区の治安が悪かったときの世代の方のイメージも変えていく。＜森元 委員＞
- 若者が起業できるベンチャー支援を行う。足立区は支援をしてもらえる区であるとイメージできることで企業が集まる。＜市村 委員＞
- 世代を問わず、みんながスポーツできるまち＜野沢 委員＞
- みんなが助け合えるまち＜笠井 委員＞
- 選択肢が多いまち＜山下 委員＞
- 新しい住民でも仲間に入れてくれるまち＜秋山 委員＞
- ITフレンドリーなまち＜片野 委員＞
- 足立区出身と誇りをもって言えるまち＜森元 委員＞